

全ト協・事業者大会特集

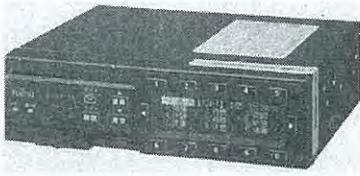
タイヤ空気圧、常時監視

富士通グループのトランスロン(本社・横浜市、加藤祐三社長)は三十日から、ネットワーク型デジタルタコグラフ(運行記録計)で使える運行支援サービスで「TPMS連携機能」を開始する。専用のセンサーを取り付ければタイヤの空気圧、温度を常時監視できるもので、事業者の燃費改善やドライバーの安全運行を支援する。

(小林 孝博)

トランスロンは平成二十二年にネットワーク型デジタル「DTS-CUI」、翌秋にドライブレコーダー機能を追加した「DTS-CI-D」を発売。どちらも、富士通のネットワークとクラウドサービスを利用したリアルタイムの運行管理ができるのが特徴だ。

運行状況の動態管理が可能なか、従来手作業だった運行管理ソフト、地図情報の更新も全て自動化。システムの維持更新だけでなく、初期導入費を含めたユーザーのコスト負担を大きく軽減した。



運行支援や地図ソフト、Q&Aなどは一括のサービスで

同社の車載器では安全強化を目的にしたサービスが次々と開始

トランスロン

提供。月々の利用料も定額で利用しやすくなっている。

異常情報を事業所でも共有

今月末から開始するのは、通信機能を使ってタイヤの空気圧、温度を事業所から常時監視できるサービス。オレンジ・ジャパンが販売するセン

30日から新サービス

サー、受信機などを取り付ければ利用できる。タイヤの空気圧を監視するTPMSは、欧米で設置が義務付けられている。韓国ではことしから法規制が始まり、日本も安全や環境意識の高い事業者の間で利用が進んでいるという。

タイヤのバルブなどに設置するセンサーの情報は最大三

十輪まで受け取ることが可能。平常時には三十分おきに車載器からクラウドセンサーにデータ送信される。あらかじめ設定した適切な空気圧や温度を逸脱すると、「注意」警告の二段階で音声で鳴り、ドライバーに異常を伝える。事業所のパソコンにも即座に状態が表示される。

日常の整備点検も効率的に

従来のTPMSは警告が車

けて実現した」と情報機器事業推進部の田中充部長。空気圧や温度の異常は履歴が残り、日常の整備点検の負荷軽減にもつながる。

今夏のトリアルではユーザーから「タイヤの日常点検はドライバーの目に頼る面もあったが、センサーの計測で品質が向上。管理者側もタイヤの状況が把握できた」と高い評価も。適正なタイヤ空気圧を維持することで、燃費も大きく改善できるという。

利用料はDTS-CUIの場合、運行管理や地図ソフトなどを含め月額二千四百七十八円。DTS-CI-Dは二千七百九十三円(どちらも一車両当たり、税込)。センサー、受信機、モニターなどTPMS機器一式は十輪モデルで十四万円ほど。取り付け費用は別途掛かる。

問い合わせ先はトランスロン情報機器営業部、電話045(476)4640。